

## 寿命の一年間

六年 伊藤 由依

土の中に、かいちゅう電灯を照らした。そのしゅんかん、からだがかわばったように見えた。私はごめんねと心の中で声をかけ、観察を続けた。もう頭は真っ黒で、りっぱなつのがびんとびている。のになぜなかなか土から出てこないのだろうか。

去年の夏、京都の南の方で野生のカブトムシを一对買った。その前の年は産卵に失敗したから、今年こそは、と思っていた。

我が家にやってきたカブトムシは、とてもおとなしく、大きさも中ぐらいだった。けんかもしていなかったから、これはいけるのではないかと期待をふくらませていた。

ある日、ケースを移しかえようとして、カブトムシをさがしていると、同じえさ台につかまっている一对のカブトムシを見つけた。ゼリー台ごと移しかえると、オスがメスに向かってゆつくりと歩いた。やがてオスがメスの上に乗リ頭と頭をくつつける。交尾だと私はこうふんする。交尾が成功するとメスは土の中に卵を産み、また命がつながれていく。メスは産卵で力を使ってしまい、弱って死んでいくらしい。オスとメスの体がびたつとそろったその時、メスが見たことのないくらい速く走った。オスはそれに必死でしがみつき、二匹とも土の中にもぐっていった。ほんのしゅんかんだった。交尾が成功したかどうかも分からずに、私はただぼかんとしていた。

オスとメスは無事土の上に出てきたが、一か月もたたないうちに死んでしまった。最後の最後は、足が折れ、力つきていた。私もお母さんも、

「卵産んでないんちゃうかなあ・・・。」  
とくやしそうに言った。今度こそはと思っていたのにと、あきらめかけていた。

その二週間後、私はいつものように音ひとつしない土を観察していた。今日も変化なし、とため息をついていると、ケースの角に何かがいることに気が付いた。それは何かの幼虫だった。カブトムシの幼虫しかありえないが、カブトムシを飼っている他の人にも確認した。

「カブトムシのだよ。」  
でしようね、とは思いますが、その心はうれしきでいっぱいになった。

初めて幼虫から育てるので、私は図かんやインターネット、カブトムシ用の土のパッケージなど、いろいろなところから知識を得た。カブトムシの幼虫は、土をえさにする。また、その土の量や質によって、成虫になったときの大きさが変わるらしい、良いものをたくさんあたえればあたるほど、成虫が大きくなる。それを知った私は、よりいっそう気合いを入れた。

だがしかし、その後お世話しない日が何か月も続いた。おかげで土はパサパサ。良質な土とはとてもじゃないが言えない状態になっていた。もう十月なので、一度土を交かんすることにした。ケースをさかさかして土をすてるところごろと幼虫が出てきた。しかも大きいものばかり。全部で幼虫は八匹もいた。末広がりの八だと家族全員で喜んだ。

新しい土とカブトムシをケースに入れると、私はほっとした。パサパサの土を食べられなくて死んでいたらどうしようと思っていたから、まさか八匹もいたなんてと思った。そしてそれからほとときカブトムシをみるようにした。

新しい年になり、そして五月になった。さなぎになる前に、幼虫は黄色っぽい色になり、つや

がなくなる。これを前ようというらしい。早ければ五月にはさなぎになると知ったのだが、前よりの心配すらしらない。幼虫は動いているので、待つだけだと思った。

六月になっても、前ようにはならなかった。さなぎのピークは、家庭のカブトムシで六月、野生のカブトムシで七月らしい。親が野生だから、い伝子でおそいのかなと思った。

そして六月の半ばごろ、やっと黄色みを帯びてきた。約一週間後にはさなぎになるみたいなので、その幼虫を観察することにした。

一週間たっても、さなぎにはならなかった。一日おきだとあまり変化が分からないから、数日おきに観察した。

そしてある日、つのを確認することができた。土の中に、つのは形の空どうができていた。成長したところが見られてうれしかった。

数日後、土の中にかい中電灯を照らした。そのしゅんかん、からだがかわばったように見えた。私はごめんねと心の中で声をかけ、観察を続けた。もう頭は真っ黒で、りっぱなつのがびんとびている。今度は羽を見た。土の中は暗くて、あまりよく見えないが、黒くなっているように見えた。もう姿は完全に成虫のカブトムシだった。羽化後すぐは羽がやわらかく、白色をしている。時間がたつにつれて羽はかたく、黒くなっていく。私が見たときにはもう羽が真っ黒だったので、羽化後だと判断した。羽化後も土の中に五日ほどいるみたいなので、あともう少しだと期待はさらに高まっていった。

そして一週間後、羽が半開きのオスが土の上に出てきた。私はおどろいて、さなぎがあった場所を見た。するとそこにさなぎのすがたはなく、ぬいだけが残されていた。羽化のとちゅうで何かがあり、羽が半開きになってしまったのだろう。私はなんだか悲しくなった。するとお母さんが、

「これも個性だよ。」

と言ってくれた。おかげで、このオスを大切に育てようと思うことができた。

その次の日、土の上には一匹もいなかった。さなぎがあった場所を見ると、なんとカブトムシがいた。地上に出てまたもどるなんてとてもおもしろいなあと思った。

数日後、今度は羽がきれいにしまっているオスのカブトムシが出てきた。私は二匹目が出てきたのかと、うれしくなった。その夜二匹いることを確かめるため、えさのゼリーを置いた。羽が半開きのオスのカブトムシは、つかまえて別のケースに入れておいた。のでゼリーが減ってれば他にもいることが分かる。

次の日の朝、ゼリーのまわりに一対のカブトムシを見つけた。上手くいったとうれしくなった。早速別のケースに入れると、にげるように土の中へもぐっていった。すると、

「明日、土すてに山行こうか。」

とお母さんが言った。幼虫期間はふんもするので、その土をすてに行こうと言われた。その中にはまだ成虫がいるかもしれないから、引き続きゼリーを一ばん置いておいた。

次の日の朝、私はねぼうをしてしまった。ゼリーは減っていたが、カブトムシのすがたはなかった。だが私は山で土をすてるときに出てくるから大丈夫だと思っていた。

家の近くの山に着き、早速土をすてはじめた。出てくることは分かっていたから、いつでもつかまえられる体勢になっていた。ケースの底の方になって、一匹目の体が見えた。つのがない、メスだった。さらに、もう一匹メスがいた。二匹いたんだ！とうれしくなったが、それと同時にあせりも出てきた。オスはつのもてば良いのだが、メスは持つのに最適な場所がない。持とう

とするとあばれた足が私の手をひつかくので、とてもじゃないが持てないのである。それが両手だとすると一しゅんでギブアップするだろう。でもこのままじゃにげてしまう、そう思ったときだった。なんとメスより一回り、二回り大きいオスが出てきた。私のあせりがマックスに達したとき、お母さんが助けてくれた。幸運なことに、お母さんはビニールぶくろを持っていた。すぐにうつしかえて、妹に持たせた。しかし、カブトムシはそのビニールぶくろをやぶって、にげようとしていた。私はすさまじい生命力だなと、感心してしまった。今度は空になったケースに入れた。これで大丈夫、とお母さんと私はすっかり安心してしまい、そそくさと急な山のしゃ面をおりた。すると、

「なんかおつたあ。」

と妹が泣き始めた。私たちはすっかり妹のことを忘れていた。おそらく妹は急しゃ面をおりられないきようふと、何か分からない虫がいるきようふで泣いたのだと思う。カブトムシのことばかり気にかけて、妹のことを全く考えていなかったことを、少し反省した。

家に帰り、数を数えると、オス三匹、メス三匹に見事に分かれた。家のケースに六匹は多いので、妹の友だちに一对あげることにした。その友だちはカブトムシ好きで、去年も飼っていたが卵は産まなかつたので、とても喜んでくれていたそうだ。今年も卵を産んでくれたら、今度もっと新しいことにチャレンジしてみよう、と思った。

### カブトムシ飼育 鮮明描写

カブトムシを幼虫から育て、羽化したオスの成虫は羽が半開きで、飛べなかつた。「強いイメージのカブトムシの新たな一面を知ってもらいたい」。飼育した1年間を鮮明に描写し、カブトムシへの熱意や魅力を文章でつづつた。

小学校4年の時からカブトムシを育て、昨夏に初めて8匹の幼虫を卵からかえすことに成功。凶鑑やインターネットで飼育方法や疑問を調べ、何回も観察して細かい変化を記憶した。土の量や質によって成虫になったときの大きさが変わることなど、大きく育てるために役立つ情報も参考にした。書き上げた作文を見返し、「自分はこんなにカブトムシについて調べていたんだな」と振り返る。

今年も卵から幼虫が1匹生まれ、観察を続けている。「カブトムシは友達のような存在」と話し、毎日話しかけながらその成長を見守っている。